当たり前を当たり前のように

２０２０年10月に高知県農業団体職員労働組合（高知県ＪＡユニオン）は誕生しました。誌面を借りて結成１周年に心からのお祝いを伝えさせてください。その結成に全力を尽くした仲間の奮闘に敬意を表します。労働組合を立ち上げることほど勇気がいるものはないと思います。組織された闘う労働者は逞しく美しく清々しいものであることを再確認させてくれました。

高知県ＪＡユニオンは、労働条件改善はもちろんですが、組織拡大・組合員を増やすことに力を入れています。その方針実現のために「学習と交流」を意識して取り組みを進めています。特に称賛したいのは、内向きにならず同じ組織化が課題である他単産の仲間に学ぼうとする姿勢、使用者側と対峙するために階級的な学習を取り組んでいこうとする姿勢です。当たり前だと思うなかれ。当たり前にできていないから、今の労働組合・労働運動が低迷しているのです。もちろん資本の攻撃が厳しいということは前提にありますが、それに負けずに当たり前に「学習と交流」を行うことで、労働者としての自覚が生まれます。

ユニオンの仲間たちとの交流を報告すると、仲間から金言をいただきました。「組織を継続させるのは、やる気のある一人がいるかどうかである」と。私はこう解釈しています。やる気は問題意識です。問題意識は学習と交流によって培われ、実践によって検証され、明らかになった課題は次の方針となります。そしてやる気のある一人は、二人、三人へと拡大していくのです。

労働大学企画編集委員　吉田　英和